

宍道湖の水草分布調査

(宍道湖・中海水産資源維持再生事業)
岡本 満・石田健次

1. 研究目的

近年、宍道湖では糸状藻類のシオグサ、沈水植物のオオササエビモやツツイトモが増加し、ヤマトシジミ（以下「シジミ」と呼称する）漁の妨げになるだけでなく、シジミそのものへの影響が危惧されている。このため、オオササエビモ、シオグサ、ツツイトモの分布状況等を調査した。

2. 研究方法

(1) オオササエビモの分布状況：6月～12月にかけて毎月、調査員2名が湖岸を車で周回し、目視により湖面に出現したオオササエビモの分布場所を調べた。

(2) オオササエビモの現存量：8月23日、25日に車で周回して調べた（算出方法は平成24年度年報参照）。

(3) シオグサの分布状況：5月下旬～10月下旬にかけて、調査船かしまを用い、湖内9定点の水深1.5mと2.5mの湖底で有刺鉄線を巻き付けた鉄枠を50m曳航して、有刺鉄線枠に絡まったシオグサの量を「なし・少量・多量」の3段階で評価した。

(4) ツツイトモの分布状況：シオグサ分布調査で有刺鉄線鉄枠曳きの際に採集されたツツイトモの有無を調べた。

(5) ヤマトシジミの混入状況：6月29日に宍道湖漁業協同組合による湖底清掃の回収物のうち、オオササエビモ、ツツイトモ、シオグサ内におけるシジミの混入状況を調べた。

3. 研究結果

(1) オオササエビモの分布状況：湖面では6月に出現し、8月～9月は沿岸で帯状に繁茂したのち、10月頃に葉から枯死が始まり、12月にはほぼ消失するという、これまでと同様な季節的消長がみられた。

(2) オオササエビモの現存量：全体で349トンと推定され、平成24年の調査開始以来最も多

かった平成27年の985トンの35%にとどまった。分布範囲は昨年と大差なかったことから、群落の間で繁茂するツツイトモの急増による影響等が推察された。

(3) シオグサの分布状況：5月～7月の生長期は秋鹿・大野、玉湯、宍道地区の水深約1.5mで多量に繁茂し、8月以降消失したが、9月に同地区で再び繁茂した。湖底に枯死・堆積したシオグサは、浅場では波浪により頻繁に移動し、6月下旬に消失した。深場では水深3m以浅で多量の傾向がみられ、昨年と同様な状況であった。

(4) ツツイトモの分布状況：主に水深3m以浅の湖内全域で分布が見られたが、北岸では水深4m付近でも生育が確認された。南岸ではオオササエビモのパッチ状群落の間を隙間なく埋めるほど繁茂していた。なお、10月上旬の台風通過の大時化によって多量の草体が湖岸に打ち上げられ、以降は有刺鉄線枠に絡まる草体が少なくなった。

(5) ヤマトシジミの混入状況：湖底清掃で回収された水産植物のうち、オオササエビモ、ツツイトモからはシジミがほとんど見つからなかった。一方で、シオグサからは最大250個/kgのシジミが確認された。以上から、シオグサはシジミの付着器質になりやすいが、オオササエビモやツツイトモにはほとんど付着しないことが示唆された。

4. 研究成果

調査で得られた結果は、宍道湖・神西湖調査研究報告会及び宍道湖に係る水草対策会議で発表した。